

日本18世紀学会第29回全国大会  
プログラム  
報告要項

2007年6月16日(土)、17日(日)

東京工芸大学  
中野キャンパス  
〒164-8678 東京都中野区本町 2-9-5

## 第29回大会プログラム

### 第1日 6月16日(土)

発表会場 東京工芸大学芸術情報館 1階 メインホール  
(総会のみ2階第1会議室です)

9:30 受け付け開始

10:00-10:05 開会挨拶

#### 自由論題報告

10:05-10:55 自由論題報告(1)

「啓蒙主義と演劇

——ルソーとレッシングにおける思想の二面性」

藤井 俊之(京都大学)

司会: 濱中 春(法政大学)

10:55-11:45 自由論題報告(2)

「バウムガルテン『哲学的倫理学』研究序説」

大澤 俊朗(東京外国語大学)

司会: 福田 喜一郎(鎌倉女子大学)

11:50-12:50 総会+昼食\*

総会会場 2階第1会議室

13:10-14:00 自由論題報告(3)

「ヨーロッパ製造業の東洋へのキャッチアップと原料転換」

鈴木 良隆(一橋大学)

司会: 長尾 伸一(名古屋大学)

14:00-14:50 自由論題報告(4)

「ロシアにおけるルソーの『学問芸術論』 —カラムジーンを中心に—」

杉山 春子(明治大学)

司会: 坂倉 裕治(立教大学)

14:50-15:10 コーヒー・ブレイク

15:10-16:00 自由論題報告 (5)

「18世紀後半のロシアにおける国家表象と「ギリシア」のイメージ」

鳥山 祐介 (日本学術振興会特別研究員)

司会 : 川端 香男里 (川村学園女子大学)

16:10-17:55 映画作品上映

会場 : 芸術情報館 1階 メインホール

司会...平山敬二 (東京工芸大学)

作品解説...茂木正年 (日本記録映画研究所)

上映作品 : 『J.J.ルソーの生涯と思想』

全8巻中の第2巻「学問、社会、教育への挑戦」(1時間30分)

(制作 : 日本記録映画研究所)

18:10-20:10 懇親会

会場 芸術食堂 「ルネッサンス」

会費 5000円

## 第2日 6月17日(日)

発表会場 東京工芸大学芸術情報館 1階 メインホール

9:30 受け付け開始

### 自由論題報告

10:00-10:50 自由論題報告(6)

「1738年公開のヴォーカンソン製作オートマトン「フルート奏者」について」  
鈴木 裕子(東京大学)  
司会:古茂田 茂(一橋大学)

### 共通論題 「『百科全書』研究の新地平」

11:00-11:15 趣旨説明

コーディネーター兼総合司会  
逸見 龍生(新潟大学)

11:20-12:00 基調報告

「『百科全書』の今日性」(仮題)  
鷺見 洋一(中部大学)

12:00-13:00 昼食\*

13:00-13:35 第2報告

「『百科全書』とイタリア啓蒙」(仮題)  
堀田 誠三(名古屋経済大学)

13:35-14:10 第3報告

「『百科全書』と市民的公共圏」(仮題)  
寺田 元一(名古屋市立大学)

14:10-14:45 第4報告

「典拠から考える『百科全書』の中国関連項目」  
小関 武史(一橋大学)

14:45-15:00 コーヒー・ブレイク（質問書回収）

15:00-16:00 討論

16:15 閉会挨拶

\* 16日（土）、17日（日）のお弁当をご希望の方はお申し込みください。大学周辺には飲食店やコンビニエンス・ストアがありますので、お弁当を希望されない方は各自でお取りください。

なお、保育所を必要とされる方は

**24時間保育所 ちびっこランド新宿園**

をご利用ください。最寄り駅は東京メトロ丸ノ内線新宿三丁目です。大会会場最寄り駅中野坂上は新宿三丁目から3駅目です。なるべくお早めに

**〒160-0022**

**東京都新宿区新宿 5-18-19 酒井ビル 2F**

**Tel/Fax : 03-5272-7028**

までご連絡ください。

啓蒙主義と演劇 — ルソーとレッシングにおける思想の二面性

藤井 俊之  
(京都大学)

発表では啓蒙の世紀と名づけられる 18 世紀を生きたフランスとドイツの二人の思想家ルソーとレッシングを、その演劇論において対比することで、彼らのうちに単に啓蒙主義と呼ぶには複雑な二面性を見出し、それがいかなるものであったのかを明らかにすることを目的とする。

18 世紀、啓蒙主義の精神には理性の光によって人間や社会に付きまとう迷妄を振り払おうという意図が内在していた。理性の光こそ、当時の啓蒙主義者たちにとっての根本原理であったといえよう。しかしルソーは、このような人間の持つ理性の力への信頼から生じる進歩史観には懐疑的であった。彼の思想の根源には、原初状態における孤独な人間の無垢という想定があり、それ故文明の進歩がもたらす社交圏域の拡大という事態は彼にとって人間の墮落以外の何物でもなかった。にもかかわらず、ルソーが啓蒙主義的側面をもつとすれば、それは彼も理性の光を信じ、その光のもとで他の人々を説得（啓蒙）しようとしていた点にある。それゆえ、ルソーを 18 世紀の思想空間の中で把握するときには彼自身の二面性に行き着くことになる。つまり、百科全書派と袂を分かつことになる反社交主義者、あるいは文明の進歩を人間の墮落の過程として把握する洗練への懐疑論者としてのルソーと、そういった個人的心情を叙述するさいに、他の啓蒙主義者たちと同じく、理性による推論を働かせることで自己の論拠に明証性を与えようとする理性の信奉者としてのルソーという二つのルソー像に行き着く。こうした二面性を考察するテキストとして彼の演劇論を取り上げ、そこで展開される演劇批判を検討することでルソーの啓蒙概念に光を当てる。

そして、これと対比する形でドイツの啓蒙思想家レッシングの演劇論をとりあげ、そこで論じられている演劇の持つ啓蒙的效果を検討する。そこで明らかとなるのはレッシングもまたルソーと同様ある二面性を持っていたということである。それは彼の場合には、批評家あるいは理論家としてはまさにフランスの啓蒙主義者同様に理性による自律的思考を重視する彼が、その根本に宗教思想家としての側面を持ち、終生その理論が啓蒙主義の批判の対象であったキリスト教と結びついていたということである。レッシングにおける理性的思考と宗教思想の同居を考察することによって、その啓蒙概念にも光が当てられる。

結論としては彼ら二人のもつ啓蒙の意図がどこにあったのかを「Sitte, moeurs」を巡る問いとして提示したい。

## バウムガルテン『哲学的倫理学』研究序説

大澤 俊朗  
(東京外国語大学)

A・G・バウムガルテン(1714-1762)という哲学者については、これまでほとんど、もっぱら「美学」というディシプリンの内部で議論されてきた。バウムガルテン『哲学的倫理学』研究は、かれが『形而上学』、『哲学的倫理学』、『美学』を三つの代表作とする壮大な体系を構想した哲学者であったという基本的事実に立ち返り、『美学』に比してこれまで研究の手薄だった『哲学的倫理学』という著作に肉薄しようとするものである。そうすることによってわたしは、かれの哲学体系、そして、これまでのバウムガルテン研究が集中して取り組んできた『美学』というかれの仕事の精華に表現されている「美学」というプログラムがいかなるものだったのかということの解明をめざす。

本発表でわたしは、この研究の目的を実現するためにとる三つのアプローチの構想と、それぞれの現時点までの成果を提示する。第一のアプローチは、バウムガルテンのわずかのちの世代に属するカントが、バウムガルテンをどのように受容したかということの内実を精査することである。周知のようにカントは、『哲学的倫理学』をかれの倫理学講義に用いていたのだが、みずからを恃む知識人という立場から三批判書で『美学』をあからさまに批判したのに比べて地味ながら、バウムガルテンの倫理思想に対する論難を当の講義に織り交ぜている。カント哲学の生成過程にいわば立ち会ったとでもいえるこの著作を分析することには、それだけにいっそうの意義があるのである。第二のアプローチは、これまでに日本語はおろか欧米語にさえ翻訳されていない『哲学的倫理学』の訳をつくることを前提とした、その内在的読解である。第三のアプローチは、この著作を文化的・社会的・政治的に位置づけることである。これは第二のアプローチと密接にかかわっており、テキストのなかの抽象概念はいうにおよばず、そこに差し挟まれる具体物の文化的・社会的・政治的な分析へと開いていくことを課題とする。

以上の三つのアプローチを総合することによって、最初に述べた本研究の目的の達成がめざされる。本発表でわたしは、この研究の期待の地平と、それぞれのアプローチの具体的方法を実際に立ち入って提示する。本研究はまた、カント思想についての反省の自己展開という様相さえもつようになった近代思想史そのものの問い返しでもある。

## 18 世紀ヨーロッパ製造業の東洋へのキャッチアップと原料転換

鈴木 良隆  
(一橋大学)

17 世紀までのヨーロッパは、その最先進地域においても、産業と技術と経済生活の多くの局面において、東アジアの先進地域に対して劣位にあった。こうした事実は科学や技術に関してはジョゼフ・ニーダムらの膨大な研究によって、また一人当たり GDP や賃金についても、最近の研究によって明らかにされている。しかし問題は、なぜ東西の逆転が、その直後に起こったかという点にある。西ヨーロッパは、ほぼ 1 世紀後にはこれらにおいて東アジアに追いつき、いわゆる産業革命を待たずに東アジアを追い越していった。

この報告は、木綿、磁器、絹、ラッカーなど、当時、東西に共通にみられた製品を取り上げ、18 世紀の西ヨーロッパは、狭義の製造技術では依然として東アジアに劣りながらも、原材料の素材を転換させることによってアジア産品を上回る品質や機能を有する製品を作れるようになったという点を明らかにする。これによって、この東西の逆転を説明する。そして、なぜそうしたことが行われ、またそれが可能だったかをあわせて考察する。

一連の変化は 18 世紀初頭までに起こっていた。経済の成長度合いについては、東西の間に決定的な見られなかったが、ヨーロッパでは所得分配の不平等が進行し、その結果、日常生活を超える部分に所得を投じることができる層が広く出現しつつあった。それらの人々を基盤に、流行、奢侈、嗜好といった需要が幅広く形成された。17 世紀初頭以来、東アジアからもたらされた上記の産品は、ヨーロッパの同種製品に比してはるかに美しく優れており、新規の需要を満たすものであったが、あまりにも高価だった。この逆転は、それらの需要を狙ったイノベーションが次つぎと起こったことをたどることによって、説明することができる。



## ロシアにおけるルソーの『学問芸術論』 — カラムジーンを中心に —

杉山 春子  
(明治大学)

ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) の『学問芸術論』(1750)は、ロシアにおいてもさまざまな反響を呼び、この第一論文の出版以降もルソーの著作は読者の関心の対象であり続けた。啓蒙専制君主エカテリーナⅡ世(EkaterinaⅡ, 1762-96)の時代になると、ロシアの知的エリートたちはヨーロッパ文芸共和国の社交の場に頻繁に登場し啓蒙思想家たちと面識を持つ。フランス語、ドイツ語を母語のように操ることができる彼らにとっては、言語の障壁はさしたる問題にはならない。こうした状況のなか、フランス語や翻訳で最も読まれ、近代ロシアの心性(メンタリティ)に最大の影響を及ぼしたのはルソーであった。いっぽう、ロシア・センチメンタリズムの文学・思想的潮流の主導者として知られるカラムジーン(Nikolai Karamzin, 1766-1826)は、こうしたロシアの知的エリートの代表的存在であった。また、彼ほどヨーロッパ文芸共和国の一員であることを誇りに思い、ルソーを熱烈に信奉した「フィロゾーフ」はいなかった。しかし、『学問芸術論』に対しては『学問、芸術および啓蒙について』(1794)という、ルソーの同時代人たちによる有名な『反論』とは違った趣の論駁文を發表した。これは小説家、詩人、ジャーナリストとしてすでに成功を収めていたカラムジーンによる最初の本格的な論評であった。ところで、ロシアというプリズムをとおしてのルソーイズムに言及する際、18世紀ロシアの状況、即ち、いっぽうでピョートル大帝(Petr I, 1682-1725)以降の急速な近代化運動と啓蒙君主エカテリーナⅡ世の専制政治、他方で、真の啓蒙主義を知るロシアの知的エリートの啓蒙活動との対立的な構造を考慮することが肝要である。また、外的な状況としてはフランス革命期のフランス、ドイツから伝播する様々なルソー像の認識が不可欠となる。本発表では以上の状況をふまえ、ロシア文化へのルソーの多面的な影響を容認しなかったソ連時代のイデオロギー操作の禍根を断つべく、ルソーの様々な言語、テキストが複雑に交錯するカラムジーンの当論評の本質を照射し、「ロシアのルソーイズム」研究の序としたい。

## 18 世紀後半のロシアにおける国家表象と「ギリシア」のイメージ

鳥山祐介

(日本学術振興会特別研究員)

エカテリーナ二世期（1762–96）は、ロシアがヨーロッパの強国として認識されていくロシア史上重要な時代だが、同時に文化の諸領域でロシア国家の新たなイメージが形作られていったという点でも興味深い時期である。本報告では、文学作品や宮廷行事等に現れたそうした新たなロシア国家像の問題を、ロシアのナショナル・アイデンティティの形成と深く結びつく「ギリシア」のイメージに特に注目しつつ考察する。

ピョートル一世によるロシアの西欧化はローマ帝國的モデルを志向したが、同時に正教を奉じるロシアでは以前より東ローマ、即ちギリシアとロシアとの継承性に関する議論があった。こうしたコンテクストは 18 世紀半ばより、古代ギリシアとビザンツのイメージを意図的に混交することで前者とロシアのイメージを新たに結びつける拠所となっていく。

1762 年に即位したエカテリーナ二世は、即位後様々な手段によって権威を顕示したが、中でも 1766 年に行われた騎馬競技（カルーゼル）は、1622 年にルイ 14 世がパリで催した騎馬競技をモデルとし、そのローマ的性格を継承しながら、同時にメダルなどでオリュンピア競技とのアナロジーを強調するなど、ギリシア的性格が同時に意識されているという点で興味深い。エカテリーナ期の桂冠詩人として高い名声を得たワシーリー・ペトロフも、その代表作である頌詩の中で、ギリシア・ローマのモチーフの混交も辞さずに、騎馬競技に古代ギリシアの行事の継承としての文化的象徴性を付与している。

さらに、新たなロシア国家像の構築は、1768 年よりオスマン帝国との戦争という事態に直面することで焦眉の課題となる。当時のロシアで、この戦争はトロイア戦争などと同じく異なる「文明の対決」という神話的次元に属する事件としてしばしば理解されたが、この時期の文学作品でも、ロシアと古代ギリシアとのアナロジーという新たな要素を軸に、キリスト教対イスラーム、ヨーロッパ対アジアといった伝統的な「文明の対決」の構図を再構成する動きが見られる。こうしたことは、後にエカテリーナ政権が温めていく、コンスタンティノープルを首都とする東ローマ帝国の再建を目指す「ギリシア計画」と呼ばれる構想とも符合するものである。

## 1738年公開のヴォーカンソン製作オートマトン「フルート奏者」について

鈴木 裕子  
(東京大学)

18世紀フランスの機械技術者ヴォーカンソンは、1738年にオートマトン（自動人形）の「フルート奏者」を発表した。当時は様々な自動演奏装置が考案されたが、この「フルート奏者」が特異な存在であるのは、生体器官の構造に基づいた身体機能の再現としてフルートを演奏するものだったのであり、まさに当時において「アンドロイド」と認識されていたことである。

現代の目からは、アンドロイドというと何か背徳の響きがあるが、当時においては決してそのようなイメージではなかった。彼は若い頃リヨンのミニモ会に所属し、メルセンヌらを輩出したこの修道院において、機械製作に没頭する環境を得ていた。さらに血液循環するオートマトン製作の野望を抱いていたヴォーカンソンにとって、アンドロイド製作と信仰心はまったく矛盾していないのである。

既にヴェサリウスの解剖学により、人体は全能者（神）による機械的な構成体と看做され、‘神は自ら作った製作物をわれわれが模倣することを望む’とするメルセンヌも、ハーヴェイの血液循環理論が実験証明されることを望んでいた。デカルトの機械論を参照すれば、身体の機械化とは、そもそも「機械」的であるものの機械による再現といえ、宗教に抵触するものではなかったといえよう。

では‘音楽を奏でる’という人間の行為の機械化はどうであろうか。ヴォーカンソンの論文からは、彼はフルート演奏を、音が奏でられる仕組み（物理学或いは音響学）と、演奏する身体の仕組み（解剖学）の二つの側面から物理的要因に還元し、機械による再現を試みていたことが分かる。

こうして彼はフルート演奏という物理現象の機械化に成功した訳だが、これは当時様々な反応を引き起こした。批判の言説は、‘魂がない’機械が魂の情念を表現することなど不可能とする。「フルート奏者」を引き合いに出し、人間性の称揚をはかるのは、ドイツ・ロマン主義における、フランスの唯物論批判に顕著である。

一方、賞賛の側にも、おそらくヴォーカンソンの予期しない側からの、つまりディドロら唯物論者からも賞賛を得るのである。

そもそもメルセンヌもデカルトも、ある意味神の存在証明のために自然を機械論的に把握しようとしていたのに、その現実化として「フルート奏者」が製作されたことは、唯物論者の主張を後押しすることともなったのであり、機械論的自然観の興味深い二面性をここに見出すことができるだろう。

## 共通論題 「『百科全書』研究の新地平」

会場 東京工芸大学芸術情報館 1階 メインホール

### 典拠から考える『百科全書』の中国関連項目

小関 武史  
(一橋大学)

これまでの私の調査によれば、『百科全書』には中国に関する項目が708存在する。『百科全書』の中国観を浮かび上がらせるためには、それら708の項目を内容に即して地理・歴史・宗教思想・政治・技術等々に分類し、そのそれぞれについてどのような記述がなされているかを分析するのが有効である。また、そのような方法がこのテーマを扱うときの本筋でもある。しかし、今回は別の角度から『百科全書』の中国関連項目を分析する。すなわち、記述内容ではなく典拠をもとに708項目を再編成するとどうなるかを考えてみたい。

周知の通り、18世紀のフランス思想史においては中国が重要な役割を果たしている。『百科全書』が刊行された時期にはすでに現地からの報告も十分に蓄積されており、人々は様々な立場から書かれた資料をもとに、独自の（あえて言えば自分にとって都合の）中国論を展開することができた。ところで、百科全書派には実際に中国に行ったことのある者は一人もいない。中国関連項目を執筆した協力者たちは、何らかの先行文献をもとに項目を執筆したことになる。

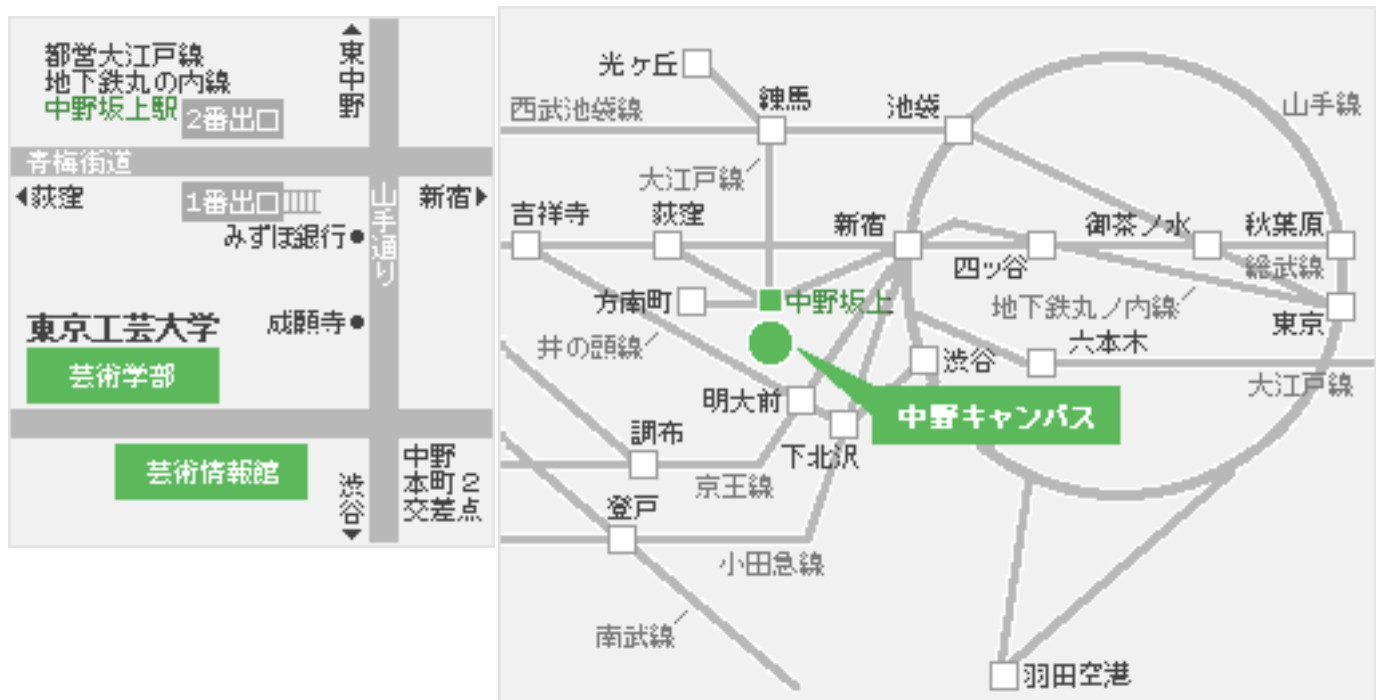
『百科全書』において中国が多面的に論じられているのに対応して、典拠として利用される文献もまた実に多様である。ル・コント神父の『中国現状新誌』（1696年）やデュ・アルド神父の『中国帝国全誌』（1735年）といった、中国全般を扱った著作だけが利用されたのではない。一見すると中国とは無縁に見える文献が多く使用されているのである。その幅の広さは、まさしく百科全書的である。中国という特定の分野における典拠利用の実態は、そのまま『百科全書』全体を貫く典拠利用のあり方の縮図となっているのではないだろうか。

本発表では、典拠利用の実態をいくつかの事例によって紹介しつつ、記述内容によらない項目分類を通じて『百科全書』の知の生産現場に新たな光を当ててみたい。

## 【会場地図＋交通案内】

地下鉄東京メトロ丸の内線・都営地下鉄大江戸線－中野坂上駅下車 徒歩約7分

1番出口より山手通りを渋谷方向に進み、中野本町2交差点を右折



2007年4月発行

日本18世紀学会

113-0033 文京区本郷 7-3-1  
東京大学大学院人文社会系研究科  
美学芸術学研究室内  
Tel/Fax : 03-5841-8958  
voltaire18th@yahoo.co.jp

